

学生取材レポート

第12回京都教育懇話会『“超就職氷河期”検証』

10月19日(火)、立命館朱雀キャンパスにて第12回京都教育懇話会が開かれた。テーマは“超就職氷河期”検証 就活は小学生から。現在の就職状況は、学生が“就職難”を感じる一方で、企業側からは“採用難”の声。学生が就職できない原因は果たして不況だけなのか。産学公のそれぞれの視点から問題点を指摘。そのあと解決策を模索するパネルディスカッションが開かれた。

第1部の講師は位高 光司さん(京都経営者協会会長、日進電機特別顧問)、山本 達夫さん(京都市行財政局人材活性化推進室長)、浅野 昭人さん(立命館大学キャリアセンター次長)の3名。

浅野さんは「4年間の大学での学びが全く機能していない」と多くの学生が就職活動と学生生活を別枠で捉えている点を指摘し、大学での学びや社会とのつながりがすべて関連していると話した。

山本さんは現在の市役所で必要とされる人材像を主張。そして位高さんは産業界から見た4つの問題点： 経済不況からくる問題点、 企業側の問題点、 学生の問題点、 学校の問題点、を指摘。

「就職氷河期は、学生の社会参画の機会が失われるだけでなく、成長の機会も失われる。それは今後の日本全体の社会的損失でもある。」と、就職問題に直面する若者だけでなく、産学官それぞれ社会全体に警鐘を打ち鳴らした。

第2部では若林 聡さん(堀場製作所グローバル人事部長)をコーディネーターに迎え、パネル討議を行った。(以下、討議の様子を一部抜粋)

若林氏:現在の就職状況は？

浅野氏:求人があるのに関わらず就職活動が出来ない学生が多い。何故自分が落とされるのか分からず、目の前に門戸が開かれていてもそこに跳びつけない学生が増えている。

若林氏:グループ会社で採用枠があってもそれが埋まらない事があるが、日新電機の現状は？

位高氏:応募は多数あるが、我々が求めるレベルに達する学生が少ない。面接でも、一生懸命良い所を引き出して答えてもらおうと思うが、ひきだせない。やむをえず採用できず採用枠が埋まらない状況が起きている。

その後、パネル討議を受けて各々のテーブルで話し合い、解決策を模索した。発表の時間になり、真っ先に手を挙げたのは立命館の生徒。「考える力を身につけさせるためには失敗することが大切。まずは自主的に動けるように、失敗しても大丈夫なように周りがサポートすることが大切」とグループディスカッションで得られた解決策を発表した。

最後に司会の学生が全体を通して「短い学生生活の中、就職活動の為だけではなく人生をより良くする為にも無形の力をしっかり鍛えなければならない」とまとめ、フォーラムは幕を閉じた。

【取材:岸本香織(追手門大)・阪口彩子(立命館大)】